

わの会の眼

コレクターたちの静かな情熱



NPO 法人あーと・わの会 書籍プロジェクト

目次

わの会展開催に当たり	草薙奈津子	6	小川千甕《岩倉村》	38
ご挨拶	佐藤修	8	森田恒友《風景》	40
画集再版に寄せて	土方明司	10	板倉鼎《黒いシヨールの女》	42
わの会展を担当して	安部沙耶香	13	田中保《静物》	44
一枚の絵がさらなる喜びへ	野原宏	14	斎藤与里《少女像》	46
編集長挨拶	平園賢一	16	真田久吉《静物》	48
			中沢弘光《富士山》	50
			二世五姓田芳柳《新羅征伐の吉凶を卜す》	52
〈作家・作品〉			渡辺與平《静物》	54
菅野圭介《哲学の橋（ハイデルベルク）》	18	後藤工志《甲州風景》	56	
中村忠二《夜の沼》	20	丸山晚霞《ヒマラヤと石楠花》	58	
竹久夢二《一座の花形》	22	小寺健吉《初秋の湖畔》	60	
中村正義《建築中の家》	24	中村研一《裸婦》	62	
星野眞吾《昇（鳥の子紙による作品）》	26	中村研一《読書婦人》	64	
山下菊二《両鳥》	28	大沢鉦一郎《裸の自画像》	66	
御園繁《伝副島種臣像》	30	大沢鉦一郎《小さい椅子》	68	
須田輝洲《静物（枇杷とキャベツ）》	32	横井礼以《丸鬘の夫人》	70	
山本森之助《中禅寺湖の暮雪》	34	横井礼以《秋草と赤蜻蛉》	72	
水木伸一《狎》	36	恩地孝四郎《池畔（台湾風景）》	74	
小堀四郎《谷中風景》	76	佐分眞《セーヌの初秋》	120	
牧野義雄《夜のピカデリー・サーカス》	78	今西中通《フサ像》	122	
河合新蔵《十和田湖ブナ林》	80	柳瀬正夢《風のある海景》	124	
矢崎千代二《ボン・ヌフ》	82	松本竣介《少女》	126	
相馬其一《ヴェニス風景》	84	長谷川利行《少年像》	128	
栗原忠二《緑蔭の牧場》	86	長谷川利行《大和家かほる》	130	
大橋エレナ《パリの公園》	88	長谷川利行《安来節の女》	130	
大橋了介《サンパウロ》	90	国吉康雄《裸婦》	134	
武内鶴之助《溪流》	92	高島野十郎《壺とリンゴ》	136	
三井良太郎《ブリーズ・ミシエ通り》	94	林倭衛《静浦風景》	138	
荒井龍男《或る風景（於パリ）》	96	野口謙蔵《暮れる》	140	
遠山五郎《赤いシャンタユ》	98	長谷川湊二郎《正倉院附近》	142	
里見勝蔵《シャボンバルの寺》	100	中西利雄《ジャルダン・テュルリー》	144	
川島理一郎《ナポリ・ポッツォリの岡》	102	藤田嗣治《兎》	146	
中山巍《老人像》	104	広本季與丸《青い服》	148	
二見利節《傘屋》	106	矢崎千代二《アラビア丸にて》	150	
本荘 起《山羊小屋》	108	井上長三郎《浜辺》	152	
松山忠三《テムズ川河口》	110	伊庭伝次郎《女学生》	154	
油井夫山《洗物する少女》	112	仲田菊代《白い壺のバラ》	156	
児島善三郎《鏡を持つ女》	114	中間冊夫《女性像》	158	
宇都宮周策《ふるさと内子》	116	山本 正《女医》	160	
林 倭衛《プロヴァンスの森》	118	島崎翁助《白牡丹》	162	

児島凡平《自画像》
 中野和高《式典会場寸景》
 峰村リツ子《X氏像》
 小松義雄《岩と海》
 桂 ゆき《みみずく》
 古茂田守介《少女像》
 古茂田守介《裸婦二人》
 清宮質文《少女》
 清宮質文《雨後の貯水池》
 太田聴雨《愛陶》
 木村莊八《牛肉店階上》
 南城一夫《静物》
 木田金次郎《晚秋風景》
 金山平三《釜屋濱の岩》
 楠 瓊州《寒光山水図》
 吉岡 憲《漁村》
 荒井龍男《朱の中の朱（イビラプエラ）》
 鳥海青児《黄色い人》
 瑛 九《旅人》
 菅野圭介《静物（飛驒の箆笥）》
 藤井令太郎《ステンドグラス》
 芝田米三《黒い道》

164 166 168 170 172 174 176 178 180 182 184 186 188 190 192 194 196 198 200 202 204 206

須田国太郎《二匹の馬》
 瑛 九《遊園地》
 安藤信哉《対話》
 小山田二郎《人間形態》
 小泉 清《裸婦》
 小泉 清《自画像》
 三上 誠《作品》
 下村良之介《作品》
 星野眞吾《鉄と画鋏》
 中村義夫《早春薄暮》
 網谷義郎《二人》
 小出三郎《人》
 小出三郎《箱根駒ヶ岳》
 喜多村知《海近く》
 吉川三伸《冬山》
 大塚 武《ベニス》
 山本 弘《赤鬼》
 菅 創吉《出会い》
 麻田 浩《花》
 麻田 浩《物たちのおもい》
 奥村光正《コルシカ風景》
 三岸黄太郎《谷あい》

208 210 212 214 216 218 220 222 224 226 228 230 232 234 236 238 240 242 244 246 248 250

金子周次《入港》
 山縣 章《蓮沼海岸》
 福地敬治《山村》
 駒井哲郎《笑う幼児》
 田淵安一《三天界》
 大沢昌助《無題》
 大沢昌助《めばえ》
 松永敏太郎《山茶花を見る女》
 澤田利一《マジョリカ壺の白百合》
 解良常夫《春光》
 相原求一朗《厳冬旭岳》
 玉之内満雄《水辺の古城》
 増田 誠《オー・ボン・ロワン・ビストロ》
 永田精二《静物（果物）》
 脇田 和《パン屋の子》
 箕口 博《邪鬼》
 岩崎巴人《河童まんだら》
 岩崎巴人《色即是空》
 鬼頭 曄《酔いどれ天使》
 梅野木雨《自像》
 宮下まさつら《関に立つ天女》
 品川 工《フタリ No.2》

252 254 256 258 260 262 264 266 268 270 272 274 276 278 280 282 285 285 288 290 292 294

菊地又男《メキシコの夜》
 高野卯港《美術館レストラン》
 正木 隆《造形01-8》
 北村四海《イヴ》
 北村正信《若い女》
 戸田海笛《曠野》
 土方久功《マスク》
 川上邦世《魔驅》
 武井直也《女の首》
 建昌大夢《井原氏の顔》
 菊池一雄《若い女B》
 柳原義達《赤毛の女》
 砂澤ビッキ《木面》
 コレクターとそのコレクション
 編集後記
 NPO法人あーと・わの会のご案内
 作家索引
 所蔵家・執筆者一覧

296 298 300 302 302 306 308 310 312 314 316 318 320 322 328 331 332

丸山治郎
 堀 良慶

わの会展 開催に当たり

草薙 奈津子

平塚市内に医院を構える平園賢一先生は時々ふらっと美術館の学芸員室に現れる。そして美術談義のような、そうでないようなことをしばし談じて帰られる。だからなんとなく仲良くなり、展覧会に出品して頂いたことも一度や二度ではない。いわゆる誰でも喜ぶよく知られた作家というよりも、かなり個性的な作品を所蔵しておられる。後に作家名が清水敦次郎と判明したが、お借りしたときには作家不詳であった「骸骨と老人」を描く暗い細密画は、今でも印象深い。最近は落合朗風の下図を手に入れたとのメールを頂いた。拝見するのが楽しみである。

そんな平園先生が、ある日一冊の本を持参された。三〇〇頁以上とかなり大部である。それが『わの会の眼』であった。副題に「コレクターたちの静かな情熱」とあるように、ほとんどの方が、学芸員ならだれでも知っているような著名なコレクター、というわけではない。でも作品を愛することにおいては誰にも負けない、否、自分が世界一だと思っているような熱狂的コレクターのようである。それは『わの会の眼』の三五名のコレクターの文章を読めばよく判る。

私が長い学芸員生活で接してきた多くの個人コレクターの特徴を挙げると、自分の所蔵作品に関してとはとなく詳しい。実際に見て感じてのことだから、根拠に自信がある。それに作品の由来に関してもかなり勉強していて、またまた詳しい。その上、その作品をとにかく愛しているから全てを好意的に考える。学芸員にもそういう人はいっぱいいるだろう。しかし学芸員

はどうも客観的、学術的に考えたがる。だから同じことを言っても、接し方、愛情の寄せ方が異なるのである。コレクターの愛情とは親子の愛情のようなものかもしれない。切っても切れない、私心がないのである。

こういうコレクターにお会いするのは時に怖い。いいカモが来る、美術談義をしようと待ち構えているからである。富岡鉄斎の軸の画賛を「読める方がおかしい」といったのは確か小林秀雄ではなかったかと思う。そんな鉄斎作品の所蔵家にお会いした時、難解な画賛を手書きした便箋を表示された。私に講義して下さったようなものである。でも実に楽しそうで、こういう方こそ本当の美術愛好家、本当のコレクターだと思った。

段々そういったコレクターが減り、会社や法人がコレクターとなり、拝借時の楽しみが減っていったと思っていた。でも最近、また個人コレクターが増えてきたのではないかと思うときがある。美術館が増え、展覧会が増え、以前のように代表作以外も展示するようになったからである。要するに個人が所蔵するような、代表作以外の秀作に学芸員たちは目を向けるようになったのである。そしてそういう作品を喜ぶ鑑賞者も増えてきたのである。今回、平塚市美術館で「わの会」の展覧会をやらせて頂くのも、美術館としても展示作品に対するキャパシティーが広がり、見る側の鑑賞眼も多様化したからである。

「小粒だがピリリと辛い山椒」のような展覧会になると思っている。

(くさなぎ・なつこ／平塚市美術館館長)

絵が時を超えて人の眼に供されるには、画家自身の力だけでは如何ともしがたいものがあります。

天下の青木繁も、梅野満雄という畏友がいて、その献身的行為があったればこそ、作品の散逸が免れ、青木の今があります。

満雄の子息である梅野隆さんは、一念岩をも通すの例えの如き凄まじい執念によって「菅野圭介巡回展」を実現させました。

たった一人の奮闘が美術史の記述を書き変えていったという二つの事例です。

梅野隆さんは、平成一〇年、コレクター人生の集大成として、信州の北御牧村（現・東御市）に収集作品を寄贈し、「梅野」の冠を戴いた梅野記念絵画館の館長職に就きました。その際、こう宣しました。「梅野コレクションは、億万の富を持たずとも、美を希求する心と確かな審美眼があれば、斯くの如き個性的な蒐集ができるのだという証左である」と。更に続けて曰く、「私から世の美術愛好家へのメッセージでもある」と。俺に続けと鼓舞しているのです。梅野さんを知る美術愛好家で、この言葉を収集の道を

歩む支えとされた方は多いと思います。

梅野さんは好んで「蒐集」という文字遣いをしました。梅野さんの修羅の如き奮闘ぶりを知る人は、その文字遣いに梅野さんの覚悟のほどを見、「蒐集には鬼が棲む」と評しました。

このほど、梅野さんと深い縁のある「わの会」の皆様のコレクション展を、梅野記念絵画館において開催の運びとなりました。個性的な美術愛好家による選りすぐりの逸品に出会えることを楽しみにしています。

(ヤとう・おさむ／東御市梅野記念絵画館館長)

この画集が刊行されたのが今から三年前のことである。掲載作品は一五〇点を超え、一点一点に所蔵者のコメントが付けられている。どのコメントも委細をつくしたもので、その熱意に正直、驚いてしまった。また何よりも作品に対するコレクターの強い思いが伝わってくる。知られざる画家、珍しい作品の数々。いわゆるミュージアムピースではないが、どれも珠玉の作品ばかりだ。図版だけではなく、是非とも実作品を見たいと思った。画集刊行の中心となった、野原さん、平園さん、堀さんも同じような思いであったらしい。画集刊行記念の展覧会の話で盛り上がった。作品集荷、展示、ポスター・チラシの制作等々、実現にはハードルがいくつかあったが、双方協力し、三年後になんとか実現の目途がたった。

言うまでもなく、「わの会」は熱心な美術品コレクターの集まりである。ぼくが知っている何人かの会員の方たちから考えると、洲之内徹氏、梅野隆氏、尾崎正教氏に少なからぬ影響を受けたコレクターが多いのではないか。この三人には新人学芸員のころ、ぼくもお世話になった。洲之内さんは、鳥海青児展で親身になって助言をいただき、それが縁で現代画廊に行くようになった。絵に向けた、愛おしむような眼差しが忘れられない。梅野さんは京橋の藝林で何度かお会いした。菅野圭介ほか、たくさんの優品をみ

せていただいた。尾崎さんは、大沢昌助先生のアトリエでお会いすることが多かった。それぞれ本当に懐かしい。評論家や学芸員とはひと味もふた味も違った、絵の見方、接し方に初めてふれた。なによりも理屈抜きに絵好きとの出会いが嬉しかった。学芸員としての助走の時期に、この三人の方たちに会えたことを今改めて感謝する。

最初に就職した練馬区立美術館は、ぼくを含め四人の学芸員とも大学で学んだだけの未経験者ばかり。世はバブルで、近くの池袋にはセゾン美術館、東武美術館、古代オリエント博物館があった。美術館としての独自性を打ち出すため、日本の近現代美術の自主企画展に展覧会を絞った。ぼくが担当したのは近代日本洋画である。大学でスペイン美術を専攻してきたから洋画が少しは分かるだろう、という乱暴な割り振りであった。ぼくにとっては未知の世界である。当時は日本の近代美術史を専攻できる大学は皆無であった。つまり学問として認められていなかったのである。しかし、日本の近代美術は実作品を手にとって調査できる。これは西洋美術を学んできた者にとって新鮮な驚きであった。がむしゃらに突っ走ろうとする。ぼくを心配して、そのころ鎌倉の美術館にいた原田光さんが洲之内さんをはじめ、画商や画家たちを紹介してくれた。二〇代のぼくが、鳥海青児展、山口長男展、鬚光展、山口薫展を立て続けに実施できたのも、こうした協力者に恵まれたからである。彼らの紹介により、多くのコレクターの方たちにもお会いした。博多駅前の一等地にある銀行の最上階では、頭取が集めたというコレクションをみた。キリコヤタンギーのミュージアムピースがずらりと並び、また釧路の大きな漁業

会社の社長は、非公開の個人美術館を持っていた。そこでみた日本の近代洋画コレクションは、質量ともに、公立美術館を圧倒するものであった。しかし、今振り返ると、そのような大コレクターよりも、いわゆる好事家といわれる小さな個人コレクターとの出会いが印象に残る。秘蔵の一点にかける愛情と情熱は、人と美術作品との出会いの原点と映る。そうしたことを思うのも、先に挙げた三人の方たちとの出会いがあったからに違いない。

今回、本画集掲載作品を中心とする、「わの会」会員の珠玉のコレクションが平塚市美術館で展示される。これもまた、州之内さん、梅野さん、尾崎さんのご縁の続きであろうと感じている。

(ひじかた・めいじ／平塚市美術館館長代理)

わの会展を担当して

安部 沙耶香

画集『わの会の眼』を拝読し、コレクターたちの熱い想いがひしひしと伝わってきた。画集のサブタイトルには「コレクターたちの静かな情熱」とあり、本書の内容をみることが表していると言えるだろう。まだまだ新米の学芸員である私は、知らない作家も多かったが、コレクターたちのコメントは作品に対する熱い想いだけでなく、丹念に調査されていることにも感心した。学芸員である私はもちろん、館蔵品に対する強い関心はあるが、コレクターたちの自分のコレクションに対する愛情とは、また違ったものと言える。コレクターたちは、ときには苦勞し、ときには大きな喜びを感じながら、自ら発掘し、身銭を切って美術品を集めている。コレクター達の珠玉のコレクションを紹介する展覧会を担当するということは、今後の学芸員人生において、美術作品に対する接し方を問い直すきっかけになると思う。コレクターたちの熱い想いを受継ぎ、より多くの人々に作品を見てもらうために展覧会を成功させたいと願うばかりである。

(あべ・さやか／平塚市美術館学芸員)

「蒐集も亦 芸術である」。東御市梅野記念絵画館初代館長であり、コレクターの大先輩で我々の敬愛する、梅野隆氏の言葉です。

私たち、絵の魅力にとりつかれたものの目指すところでもありません。足と目で長い年月をかけて、苦労しながら、ときには大きな喜びと、満足感を味わいながら蒐集した、自分の大好きな、思いのこもった絵を、多くの人に見てもらいたい。

コレクターなら誰でも一度はそんな思いに駆られたことがあると思います。しかしその実現はなかなか困難です。

コレクターが作るわたくし美術館・NPO法人あーと・わの会も創立以来展覧会を開催するたびに図録を作り、会報も毎回継続して発行してまいりました。それらを通覧してみますと、会員のコレクションの質の高さとその思いは何物にも代えがたいものがあることに気がつきました。

一冊の本にまとめてみたら、今までにない、楽しく肩の張らない絵好きの目線で集めた、色々な絵の素晴らしい本ができるかと確信しました。

そして多くの人に蒐集した絵を見てもらいたいという私たちの夢もかなえることができるのではと考えました。

こんな画家のこんな作品があったのか。こんな作品を手元において楽しんでいた人がいたのか。この本が縁となり人と絵の輪が大きく広がり、美術愛好家が一人でも増えて、多くの埋もれた作家の作品に光があたることになれば素晴らしいことだと思えます。

「高名高額の画家の絵ばかりが、良い絵で、美しいわけではありません」

この度、多くの方々のお力添えをいただき、私たちコレクター憧れの、平塚市美術館と東御市梅野記念絵画館という公立美術館二館で展示をしていただくことができました。夢のようなことです。コレクターの団体としては初めてのことでないでしょうか。関係者の皆様に衷心より厚く御礼申し上げます。

NPO法人としての事業が認められることと思えます。これを機に皆様のご理解をいただきながらさらに努力してまいりたいと思えます。

あなたの好きな一枚の絵をさがしてください。きっと見つかります。そして楽しいひと時をお過ごしください。心をつレッシュするには、大好きな自分だけの絵を見つけ、その絵の中に自分の気持ちを投射してみるのです。

この本を目にされた方が私たちの仲間に加わってくださいることを期待しています。

(のらはら・ひろし/NPO法人あーと・わの会理事長)

この度、平塚市美術館と東御市梅野記念絵画館の真心こもった全面協力（共催）を得て、「知られざる名品 サラリーマンコレクター わの会展」が開催されることになりました。また、これを機に画集が再版される運びになりました。本当にありがとうございます。数ある埋没作家・忘却作家の中から会員各自の審美眼で拾い集められた市井の名画たち。どの作品にもコレクターの熱き思いと発掘顕彰精神が込められています。もし読者の皆様が、「絵を蒐めるとはこういう事だったのか」、「私も絵を蒐めてみようかな」と感じて下されば大成功です。是非、身銭を切ってご自分の目と心で絵を買ってみて下さい。どんな化学反応（感動）が起きるか実体験してみてください。そして、その感動がまた新たな美を発見します。

コレクターの一体が公立美術館で自慢の作品を公開するのは全国初と思います。この展覧会が日本の美術啓蒙運動に一石を投じられれば望外の喜びです。

最後に私の好きな芸術論で挨拶を閉めたいと思います。芸術とは「見えるもの」を通して、より高い「見えないもの」へと人間を引き上げてくれる…「蒐集亦芸術」。

（ひらその・けんいち／書籍プロジェクト・リーダー）